

## ノート

# 松島湾で確認されたノコギリガザミ類について

矢倉 浅黄\*1

Confirmation of *Scylla paramamosain* in Matsushima Bay

Asagi YAGURA \*1

キーワード：ノコギリガザミ

ノコギリガザミ属 *Scylla* は熱帯から温帯にかけて生息する大型の食用ガニであり、生息域は利根川河口以南の内湾や河口であるとされる。国内で漁獲対象となるほどの個体群が維持されているのは静岡県浜名湖、高知県浦戸湾、沖縄県八重山諸島だけである<sup>1)</sup>。

現在は4種に分類されており、日本にはそのうち3種が生息しているが、かつて種の分類に混乱があり、現在の和名と種名との対応が用いられ始めたのは2000年代に入ってからである<sup>2)</sup>。このうちトゲノコギリガザミ *Scylla paramamosain* は最も高緯度水域まで分布を広げている種で静岡県清水港および浜名湖、高知県浦戸湾、宮崎県に多く、アミメノコギリガザミ *S. serrata*、アカテノコギリガザミ *S. olivacea* は沖縄県及び静岡県清水港で多産し、稀に浜名湖でも漁獲が見られる<sup>3)</sup>。

今回、ノコギリガザミ属のカニ1個体が松島湾から得られたため、報告する。

## 材料と方法

2020年9月29日、松島湾の焼島及び九ノ島付近、水深2m～4mの海域を漁場として刺網漁を営む漁業者により漁獲されたカニ1個体が持ち込まれた。当該漁業者の操業域と松島湾の地理を図1に示した。

この個体について外観を観察し、甲長・甲幅・重量を測定した上、阪地ら<sup>2)</sup>に基づき種同定を行った。また、漁獲の動向について漁獲した漁業者に聞き取った。



図1 松島湾図

## 結果

得られた個体の写真を図2に示す。この個体はオスで、甲長90mm、甲幅130mm、右の第3歩脚が欠落した状態で重量は651gであった。上面は緑褐色、腹面は淡黄色で、鋏脚の裏側は橙色がかっていた。前額突起は高く正三角形に近い形で、鋏脚と第5歩脚に明瞭ではない網目模様があり、鋏脚の腕節外側にはやや鈍い棘があった。

漁業者からの聞き取り情報は以下の通りであった。

- ・震災前、遅くとも2000年頃には、ガザミ漁期（7月～10月）中、数日に1匹程度漁獲されることがあった。また、12月まで漁獲が見られた年もあった。
- ・数も少なく、種類もわからなかったため有用種だとは思わず、漁獲対象とは認識していなかった。
- ・震災後に急増したガザミと異なり、急激に漁獲が増えたようなことはない。

\*1水産技術総合センター

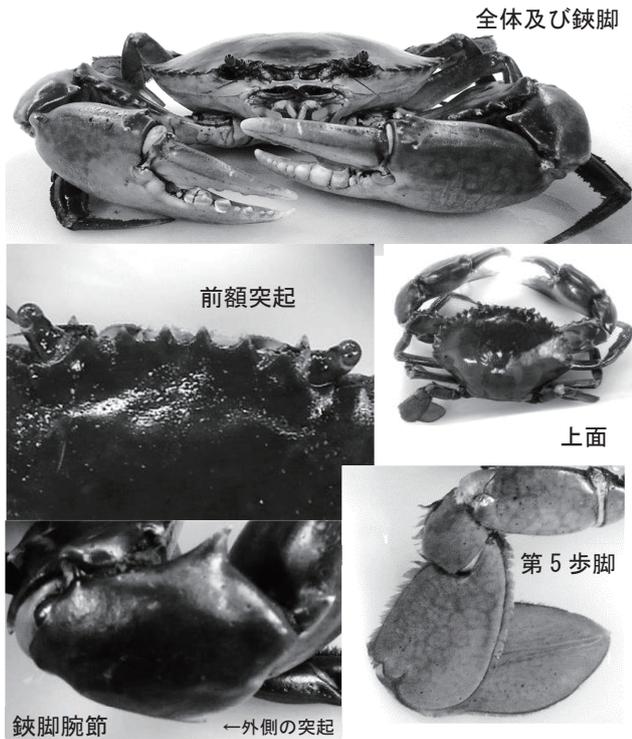


図2 各部の写真

本個体の前額突起や歩脚の網目模様などは阪地ら<sup>2)</sup>に示されたトゲノコギリガザミの特徴と一致した。同報には、鉗脚腕節外側の棘の形状について、トゲノコギリガザミ及びアカテノコギリガザミは「中央に鈍い突起」アミノコギリガザミは「明瞭な2棘」であるが個体差が大きいことが記述されており、本個体にはやや鈍い突起が確認された。以上より、トゲノコギリガザミと同定した。

これまで東北地方におけるノコギリガザミ属の採集報告記録は確認できなかったため、本報は東北地方におけるノコギリガザミ属の初記録と考えられた。また、漁業者の聞き取りからは、今回漁獲された個体が例外的な存在ではなく、ガザミの漁期中にある程度の頻度で混獲されていることから、数は少ないながら松島湾内にトゲノコギリガザミが生息していると考えられた。

高知県浦戸湾では5月に出現した稚ガニが早ければ当年の秋、通常は翌年の春に体重約200gになり漁獲加入する<sup>4)</sup>ことが報告されており、高知県海域と比べて高緯度海域かつ低水温である松島湾において651gの本個体が当年生まれである可能性は極めて低い。すなわち、本個体は少なくとも1度は越冬を経験した個体である可能性が高い。

平井<sup>1)</sup>は静岡県浜名湖の付属湖であり浜名湖におけるノコギリガザミ漁獲量の65~90%を産出する庄内湖では、ノコギリガザミの庄内湖内外の移出入は考えづらく、湖内で越冬する可能性が高いと推察している。2010年~2018年の浜名湖水温観測データ<sup>5)</sup>によると、庄内湖の中央付近・白洲の海底直上(水深2m)水温がもっとも低くなったのは1月または2月であり、その値は4.6°C~10.9°C、平均6.6°Cであった。一方、2013年~2020年の松島湾水質調査結果<sup>6)</sup>によると、最も低温となる2月において、松島湾内の調査点における海底直上水温の最低値はこれより低く1.3°C~4.3°C、平均は3.0°Cであった。また、最高値の平均は5.3°Cであった。しかし、松島湾の外側、宮戸島東部に位置し仙台湾に面する調査点(水深4.0m)における海底直上水温は4.5°C~8.0°C、平均は6.2°Cであり、湾内に比べ高い値となっている。すなわち、松島湾内での冬季水温は庄内湖よりも低く、地点によっては庄内湖の最低水温を下回るが、比較的高水温の場所では庄内湖の最低水温よりは高く、また仙台湾に面した海域ではさらに高水温で、庄内湖と近い水温であった。トゲノコギリガザミがどの程度の移動範囲を持つのかは不明であるが、少なくとも松島湾内もしくは湾外の浅所では、水温の観点からは越冬できる可能性があると言える。よって、本個体が宮城県海域での越冬を経験している可能性は十分にあるといえる。

また、棟方<sup>7)</sup>は北海道木古内でノコギリガザミ属の分布を記録している。これに対しては、本尾ら<sup>8)</sup>などによって査定への疑義が呈されているが、棟方の報告に基づくなら、ノコギリガザミ属の分布範囲及び耐えうる冬季水温の範囲は従来考えられていたよりも広い可能性がある。

なお、成体のノコギリガザミが黒潮により南方海域から来遊している可能性について否定はできないが、本種は内湾や汽水域を主な生息域とする種であり、平井<sup>1)</sup>においても庄内湖からの移出入が確認されないなど、あまり長距離移動を行う性質はないと考えられること、本州太平洋側における分布北限とされる利根川河口付近から本県沿岸の沖合の中間海域において採集報告が確認できなかったことなどから、成体での来遊の可能性は低いと考えられる。

本種が松島湾及び仙台湾を、その生活環を通して生息の場としているかについては今後の課題であり、生態について新たな知見が得られることが望まれる。

### 参考文献

- 1) 平井 一行 (1987) 浜名湖におけるノコギリガザミの生態と漁業. 静岡県水産試験場研究報告, **22**, 39-53.
- 2) 阪地 英男・伏屋 玲子 (2015) ノコギリガザミ属の種名と和名の対応の変遷. *Cancer*, **24**, 47-51.
- 3) 本尾 洋・長澤 龍志 (2007) 日本海で漁獲されたノコギリガザミ類. *Cancer*, **16**, 1-9.
- 4) 高知県水産試験場 (2017) 高知県海域における漁海況と主要魚種の資源生態 (平成28年度PDF版). <https://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/040409/seikahoukokusyo-aohon28.html> (2020年12月15日閲覧), 96, 141pp.
- 5) 静岡県水産技術研究所浜名湖分場ホームページ 浜名湖の水温  
[https://fish-exp.pref.shizuoka.jp/hamanako/1\\_kaikyo/1wt\\_hamanako.html](https://fish-exp.pref.shizuoka.jp/hamanako/1_kaikyo/1wt_hamanako.html) (2020年12月15日閲覧)
- 6) 宮城県水産技術総合センターホームページ 松島湾水質調査結果  
<https://www.pref.miyagi.jp/site/kankyo/suisitu-mt.html> (2020年12月15日閲覧)
- 7) 棟方 明陽 (1997) 北海道教育大木古内臨海実験所附近海辺の動物相. 生物教材, **17**, 23-29.